

れき じん

となん歴史民だより vol.20

Morioka tonan history and folklore museum

平成21年9月15日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228



史跡・文化財巡りのお知らせ (9月29日開催)

巡回地域

紫波町・花巻市・遠野市

募集人数・期間

30名(成人)・9月15日(火)～9月26日(土)

参加費

3600円(バス代・昼食代・資料代含む)

募集方法

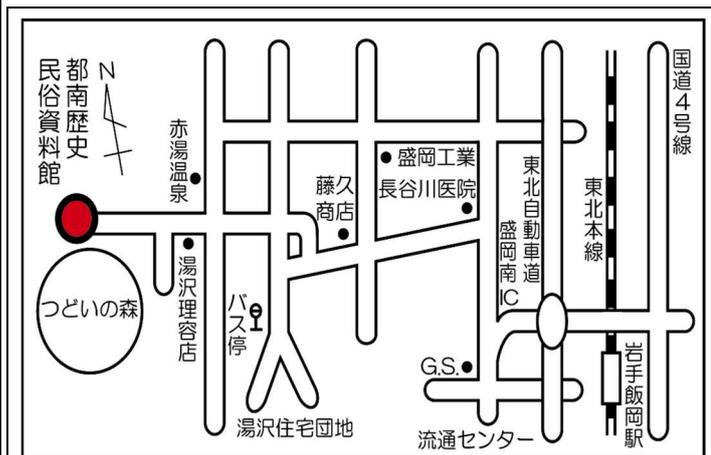
往復はがきに、氏名、住所、年齢、自宅電話番号、乗車場所を書いて、盛岡市都南歴史民俗資料館(〒020-0842・盛岡市湯沢 1-1-38)へ郵送。

9月26日(土)必着

— もくじ —

- ・〈寄稿〉
「盛岡古武道史」に出てくる「壬生義士伝」主人公・吉村貫一郎
- ・盛岡藩領内に伝わった『たとえ』④
- ・資料は語る⑳
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㉑
- ・となんの昔ばなし㉒

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
- 年末年始

「盛岡藩古武道史」に出てくる「壬生義士伝（みぶぎしでん）」主人公・吉村貫一郎

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 田 鎖 壽 夫

作家・浅田次郎氏の小説「壬生義士伝」は南部盛岡藩の脱藩浪士・吉村貫一郎が新撰組に入隊、義理と愛を貫く姿を描いた作品である。果たしてこの主人公は盛岡藩に実在した人物なのか、もし実在した人物であるならば、作者はどのような古書を根本資料として参考にし、推考・執筆したのであろうか・・・2002年（平成14年）に「壬生義士伝」が時代劇ドラマとなりテレビで放映されたときから、この疑問が頭から離れなかった。

小説では、腕の立つ「奥州盛岡、北辰一刀流免許皆伝」として登場する。そこで明治41年7月に、桂寛七郎が編纂した『南部藩武道名鑑「忌辰録」』で調べてみたが、吉村貫一郎の名前は見あたらなかった。この編纂者は、北辰一刀流兼桂流剣術師範で、秋田戦争の生き残り、最後の剣客であったと、「檀山佐渡のすべて」の著者・太田俊徳氏は述べている。その他に武術に関わる文献をみたが、貫一郎の名前を見つけることが出来なかった。

3年前である。古本市で歴史関係の本を見ていると、「盛岡藩古武道史」という題名の本が目にとまり買い求めた。これは昭和33年10月に印刷・発行された非売品の本で、盛岡藩内に伝わった兵法をはじめ、弓、槍、剣、柔、砲術の流派と師範名を集大成したものである。著者は諸賞流と無辺流師範であった米内包方（かねまさ）氏、発行所は旧盛岡藩士桑田である。この本の巻末に、「古人の逸話」として7人の逸話を伝えている。その中の1つに「切腹の仕損ない」という題で、吉村貫一郎を紹介しているのである。

その概要は次のようなものである。

『切腹にも様々な例があるが、武士として珍しい死に様もある。これを称して、死に損ないといわれる。吉村貫一郎、ごく軽輩もので、妻子5人を養うこともできず、人一倍妻子思いの彼は、一分でも多く入金を目当てに意を決して遂に脱藩し、大坂へいった。文久2年のころ、新撰組に応募した。学問も相当あり、剣術も出来るので間もなく浪士調役兼監察となった。やがて鳥羽・伏見の戦いが始まり、隊長も鉄砲で倒れ、隊士も散り散りとなり、敗北退却し、傷ついた隊長を守って、船で江戸に逃れた。しかし吉村は遂に味方とはぐれてしまい、行き場所に困り果て、盛岡藩の仮屋敷に留守居役をしている旧知の大野某を尋ねて身を寄せた。だが大野は「南部武士に貴様のような者がいたことは、我が藩未代の恥である。いづれ縄目の恥を受けなければならない。いさぎよく切腹いたせ」と諭した。進退極まった吉村は、遂に決心して切腹したが、古来から伝わる切腹の作法もなく、その死に様たるや誠に未代の恥と笑われるに至ったことは返す返すも気の毒である。彼の死に様は、激痛のため部屋を這いずり回り、さては転げ回り、苦しみのあまり、腸がはみ出したものをつかみ、あるいは目を突き頬を切り、七転八倒の苦しみにのたうち回り、実に悲惨と言おうか、無残と言おうか、言語に絶するものであった。喉を突くとか、切るとかの手もあつたらうに、夜を徹して唸り続け、翌朝明け方に至りようやく死に絶えた。死に望んでもなお、妻子に送金するのだけは忘れず、小刀と若干の金が入った紙入れだけを床の間に置き「この二品拙者の家へ」と大書きしてあつたといわれる。切腹の手本となる者は数々あるが、これもある一面の手本となろう』と結んでいる。

この記述から、吉村貫一郎という人物が盛岡藩に実在したことは確かのようなのである。推察するに、当時江戸仮屋敷に居住した旧知の大野か、その周辺の者から流れた話が「無辺者の語り草」として伝えられ、この本に収まる結果となったと思われるが、ここに書かれてある事が全くの実話であるかどうかは定かではない。しかし小説の中での切腹のシーンを再度読んでみると、この本に書かれてある死に様と実によく似ているのである。

浅田次郎氏が「壬生義士伝」を「週刊文集」に掲載したのは1998（平成10）年9月であり、綿密に取材を重ね執筆した初の時代小説であるという。

この本が小説「壬生義士伝」の根本資料である可能性があるのではないかと・・・双方を比較してみても私の見解である。

盛岡藩領内に伝わった「たとえ」④

たかしょう こ はとな 鷹匠の子ア鳩馴らす

もんぜん こぞうなら きょうよ こども かんきょう じゅんおうせい かんじゅせい きゅうしゅうりょく つよ
門前の小僧習わぬ経読むといいますが、子供は環境の順応性も感受性も、また吸収力も強
いものです。鷹匠の子供は親のまねをして、ハトをタカのかわりにしてタカならしをするということが転
じ、子は小さい頃から親の仕事をまねているうちに、自然に業をみにつけるものだというたとえを「鷹匠
の子ア鳩馴らす」というようになったそうです。

参考・引用資料：毛藤勤治編著『北東北のたとえ』、岩手日報社、1994。

資料は語る②

こ せん 古 銭



寛永通寶は、お馴染みの貨幣かと思えます。写真の寛永通寶は、寛永と刻印されていますが宝永5（1708）年に鑄造された10文銭です。宝永5年に鑄造された寛永通寶の裏には、永久通用と刻印されているので判別できるのです。

つぎに天保通寶ですが、天保6（1835）年に鑄造された百文銭で、裏に当百という文字が刻印されていることから判別できます。

左端は、天保8（1837）年に鑄造された天保一分銀です。天保一分銀は、安政一分銀と型や重さもほぼ同じで一見見分けが付きません。しかし、天保一分銀は側面に小桜の刻印がされており、いっぽう安政一分銀の側面はヤスリがけのようになっていることから両者を見分けることができます。

右端は、文久3（1863）年に鑄造された文久永寶真文通といい4文銭です。文久永寶の字は当時老中格であった小笠原長行の書です。このほかに草文通（松平慶永書）・玉宝通用銭（板倉勝静書）があり、草文通・玉宝通用銭それぞれ「文」の字に異体字が使われています。また、玉宝通用銭のみが「寶」の字ではなく「宝」の字が使われていることからそれぞれを判別することが可能となります。

参考資料：矢部倉吉『古銭と貨幣』、金園社、1973。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介⑳
大国神社献額 15面



義経と静

文化7年(1810)から同10年(1813)にかけて、大国神社に奉納された絵画献額12面と俳諧献額3面です。

文化7年、藩の政策として城下から津志田に遊郭が移転し、盛岡藩11代藩主南部利敬により当地の鎮守として大国神社が創建されました。そのため楼主や遊女が奉納した額が多く、当時の賑わいを伝える資料といえます。盛岡藩の俳聖として有名な小野素郷による献額も奉納されています。

参考・引用資料

盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』, 2008。

報告

おもしろ貯金箱展



今回の市民参加展「おもしろ貯金箱展」は、身近なものが伝える時代背景などを感じて頂くことを趣旨に開催いたしました。夏休み期間中ということもあり、たくさんのお子さん達に来館いただきました。

今回も資料所蔵者の鎌田隆氏にご尽力頂くとともに、報道各社(テレビ局3社、新聞社2社)のご協力もあり、多くの市民の皆様にご来館頂くことができました。この場をかりて市民参加展にご協力頂きました氏ならびに報道各社に厚く御礼申し上げます。

となんの昔ばなし⑳

『助右衛門柿』

湯沢の助右衛門ど(屋号)に、助右衛門柿といわれている一本の柿の太木があります。その実は種がなく甘くて味がよいのが特長です。この柿にまつわる話しが伝えられています。

藩政時代のこと、飯岡通代官馬場軍人は、湯沢の助右衛門のところの柿が天下一うまいということで所望したがことわられました。代官は、職権をもってそれをとりあげ、新山堂の自宅に植え、湯沢柿と称しましたが一年目で枯れてしまいました。しかし、盛岡の村井勘兵衛という人が、代官から苗木をもらって市内に増やして後世に珍重されたといえます。助右衛門どの祖父は、秋になって柿が熟すると盛岡方面にかついで売り歩いたところ、その味がよいので助右衛門柿といって賞味されました。屋号の助右衛門どという名前もその柿に由来しています。

いま、助右衛門どに残っている柿の木は親木が枯れたあとから、萌え出でた芽が成長したものだといえます。